中学校社会科から高等学校地理歴史科「地理総合」への接続についての一考察

久喜市立栗橋西中学校　青柳　慎一

１．はじめに

今回の学習指導要領改訂では，公民としての資質・能力を，小学校，中学校，高等学校での学習を通して一貫性をもって育成していく視点が明確に示された。これまで小学校から中学校への接続については，学校現場においても学習内容の関連，技能や見方・考え方の育成などの視点から盛んに研究が行われ，カリキュラムの作成や学習指導法の工夫改善などに生かされてきた。中学校では，授業設計に係る教材研究や生徒の実態把握に際して，小学校の学習内容を把握することが必須となり小学校との連携を図る意識が高い。対して，中学校から高等学校への接続については，意識されることがあまりないように思われる。特に地理学習については，高等学校で長らく必履修でなかったこともあり，その傾向が顕著であると思われる。

平成 30 年告示の学習指導要領改訂により高等学校地理歴史科「地理総合」（「地理総合」と記す）が新設され，再び全ての生徒が地理を学ぶこととなった。「地理総合」では，内容の取扱いとして，内容の全体にわたって中学校社会科との関連を図ることが明記されている[1)]。つまり，中学校社会科学習の成果の上に「地理総合」の学習内容が構成されており，特に中学校社会科地理的分野（地理的分野と記す）との関連が強いと捉えられる。そこで，本研究では高等学校地理歴史科「地理総合」に着目して，学習指導要領と解説の記述を手がかりにして中学校社会科との関連を明らかにし，「地理総合」への円滑な接続を図る上での中学校社会科学習の課題について考察を試みる。本研究での筆者の課題意識は，中学校社会科で身に付けた知識や技能，社会事象の地理的な見方・考え方などが，どのように「地理総合」の学習と関連しているのか，そして，「地理総合」への接続を図る上でどのような課題があるのか，の二点である。

２．地理的分野と「地理総合」の関連

はじめに，「地理総合」と，その内容と深く関わっている地理的分野の，それぞれの内容の構成とその関連について，学習指導要領及び解説の記述を基に整理し，それぞれの内容の構成から見た特徴を俯瞰する（図１）。

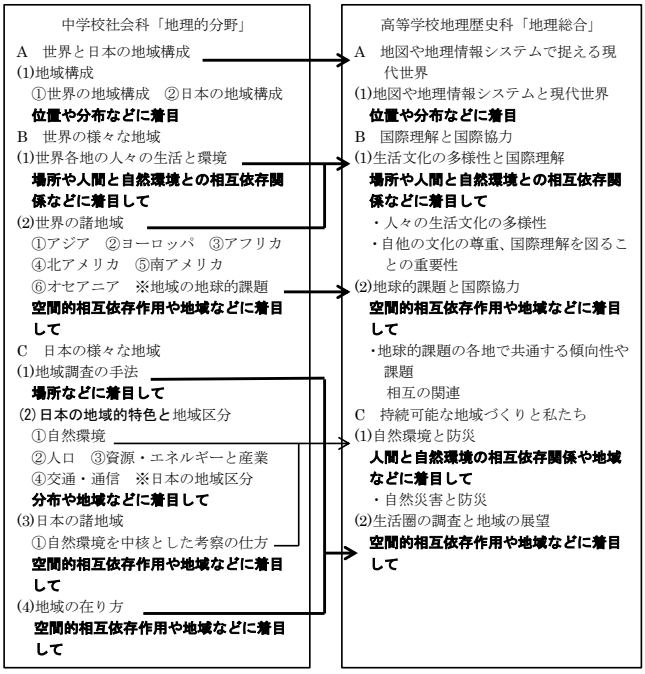

図１　中学校社会科地理的分野と高等学校地理歴史科「地理総合」との関連
注：社会事象の地理的見方・考え方を太字ゴシック体で示す。
学習内容の関連を ⟶ で示す。

地理的分野は，大項目Ａで世界と日本の地域構成を概観し，大項目Ｂで世界の地誌的な学習を，大項目Ｃで日本についての系統地理的な学習と地誌的な学習を位置付けた構成になっている。特に「日本の諸地域」は，小学校から高等学校までの地理学習を通して見たとき，日本の様々な地域を地誌的に取り上げて我が国の国土に関する認識を深める唯一の内容で，中学校の地理学習を特色付けている。「地理総合」は，大項目Ａで地図や地理情報システムなどに関わる汎用的な地理的技能を身に付け，大項目Ｂで国際理解や国際協力に関わる主題的な学習を，大項

目Ｃで持続可能な地域づくりに関わる問題解決的な学習を位置付けた構成になっている。「地理総合」は，実践的な地理的技能を身に付け，地球的課題や地域の課題を追究していく主題的な地理学習が特色となっている[2)]。

次に，地理的分野と「地理総合」の関連について，地理的技能，地誌的な学習，地域調査学習，地理的な見方・考え方の４点に着目して考察する。

(1)地理的技能について

「地理総合」の大項目Ａ「地図や地理情報システムで捉える現代世界」は，現代世界の地域構成を主な学習対象としている。方位や時差，日本の位置と領域，国内や国家間の結び付きを，地図や地理情報システム(GIS)を用いて捉える学習などを通して，汎用的な地理的技能の習得をねらいとしている。方位や時差，日本の位置と領域については，地理的分野の大項目Ａ「世界と日本の地域構成」で育んだ地球儀や地図を用いて調べる技能を活用することが想定されている。国内や国家間の結び付きについては，統計や様々な主題図の活用技能が求められる。この点については，地理的分野の大項目Ｂの「世界の諸地域」や大項目Ｃの「日本の地域的特色と地域区分」，「日本の諸地域」で育んだ，一般図や主題図，写真や統計資料などを読み取ったり，収集した情報を地図化，グラフ化したりするなどの地理的技能を活用することが考えられる（図２）。

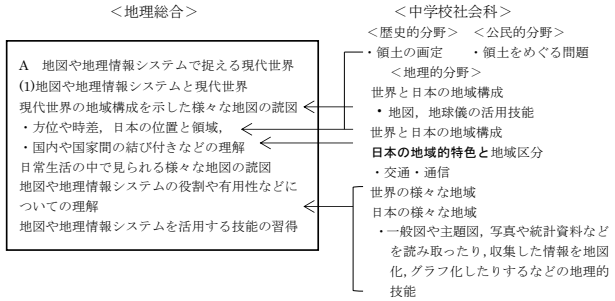

図２「地理総合」大項目Ａと中学校社会科との関連

大項目Ａ「地図や地理情報システムで捉える現代世界」は，「地理総合」の導入に当たり，中学校社会科学習での既習事項を十分に踏まえることが求められている。そして，この大項目で習得した地理的技能を大項目Ｂ，Ｃの学習に活用していく構成となっている。つまり，地理的分野で習得した地理的技能は，「地理総合」全体に関連すると言える。地理的技能については，「地理総合」の学習において「生徒の習熟の様子を踏まえて着実に身に付くよう，繰り返し指導する機会を設けることが大切である」[3)]と，指導上の配慮事項に示されており，繰り返し活用することで習熟を図ることが求められていると考える。

(2)地誌的な学習について

「地理総合」では，地誌的な学習は設定されていないが，中学校の地誌的な学習で習得した知識・技能や見方・考え方を活用して課題追究していくことが学習指導要領等の記述から読み取れる。例えば，地理的分野では大項目Ｂの「世界の諸地域」において，空間的相互依存作用や地域などに着目して各州の地域的特色を大観し理解していく。その際，世界各地で顕在化している地球的課題を取り上げ，その要因や影響を考察する。ここでの学習は「地理総合」の大項目Ｂの(2)「地球的課題と国際協力」で地球的課題について現状や要因，解決の方向性などを考察する学習と関連する。また，地理的分野の大項目Ｃの「日本の諸地域」では，自然環境を中核とした考察の仕方から，自然災害に応じた防災対策が地域の課題となることなどについて考察する学習が位置付けられている。これは「地理総合」のＣ(1)「自然環境と防災」の自然災害への備えや対応などを考察する学習と関連する。また，「世界の諸地域」の地球的課題の考察や，「日本の諸地域」において各地域で課題が生じていることを考察する学習は，「地理総合」のＣ(2)「生活圏の調査と地域の展望」で，地域の課題を見いだしたり，解決策を構想したりする学習と結び付く（図３）。

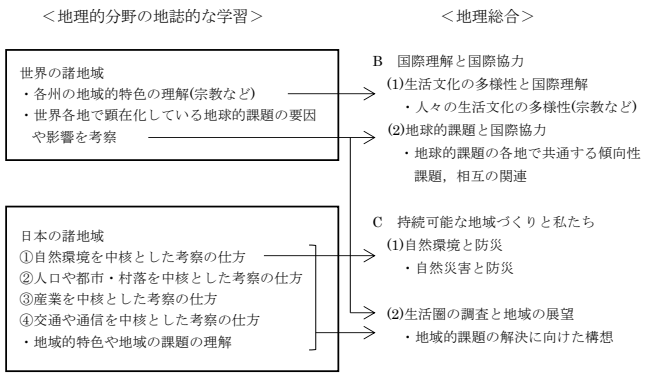

図３　地理的分野の地誌的な学習と「地理総合」との関連

(3)地域調査学習について

生徒の身近な地域を対象とした地域調査学習について，地理的分野では大項目Ｃで「地域調査の手法」「地域の在り方」の二つの中項目が設定された。「地域調査の手法」は，生徒の学区域を対象にして主題を設定して調査に取り組み，野外観察や野外調査の技能，地形図や主題図の読図，目的や用途に応じた地図の作図などの技能を身に付けることをねらいと

している。「地域の在り方」では，学習対象とした地域[4]に見られる地理的な課題について考察し，地域的な課題の解決に向けて考察，構想したことを表現する力を身に付けていく。これらの内容は，「地理総合」の大項目Ｃの⑵「持続可能な地域づくりと私たち」と関連する。この中項目では，生徒の生活圏を学習対象としているが，課題によっては学校の通学圏などより幅の広い地域を設定できることとなっている。この中項目では，実際に主題を設定して地域調査を行うことが明記されている。このことから，地理的分野の地域調査の経験と関連を図りながら学習を展開することが想定される[5]（図４）。

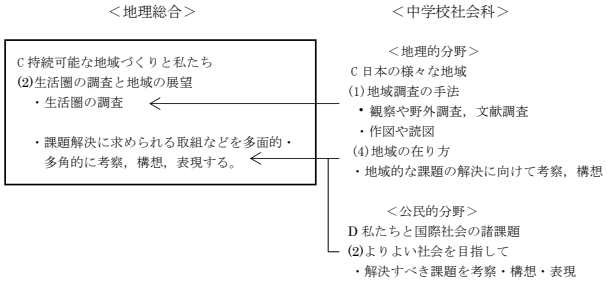

図４「地理総合」大項目 C(2)と中学校社会科との関連

(4)地理的な見方・考え方について

まず，学習指導要領に示されている地理的分野と「地理総合」の目標の柱書きを比較する。両方とも「社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して」と共通の学習方法が示されている。これは，中学校，高等学校の地理学習を通して，社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせて課題を設定し追究していく学習活動を求めていると考える。次に目標の⑵を比較する。両方とも「地理に関わる事象の意味や意義，特色や相互の関連を，位置や分布，場所，人間と自然環境の相互依存関係，空間的相互依存作用，地域などに着目して」と共通の視点が示されている。地理的分野，「地理総合」ともこの五つの視点が位置付けられている（図１）。

地理的分野と「地理総合」の相違点として，地理的分野では「多面的・多角的に考察したり，地理的な課題の解決に向けて公正に選択・判断したりする」とあるのに対して，「地理総合」では「概念などを活用して多面的・多角的に考察したり，地理的な課題の解決に向けて構想したりする」とある。「概念などを活用して」については，地理的分野の学習で獲得した概念的な知識と照らし合わせて地域的特色や地域の課題などを多面的・多角的に考察するといった思考の質の深まりが求められていると考える。そして，地理的分野では「地理的な課題の解決」について「公正に選択・判断」するのに対して，「地理総合」では生徒が「構想」することを求めている。

３．中学校社会科と「地理総合」の関連

(1)中学校社会科の構造について

「地理総合」の内容の構成を見ると，領土をめぐる問題を含む日本の位置と領域（図２），地球環境問題や資源・エネルギー問題などの地球的課題（図３）など，中学校社会科の歴史的分野や公民的分野の学習内容とも関連していることが分かる。この点については，中学校社会科が「地理的分野及び歴史的分野の基礎の上に公民的分野の学習を展開する」[6]構造になっていることを押さえて，「地理総合」との関連を捉える必要があると考える。歴史的分野では，歴史的な見方・考え方を働かせて，問題の時代的背景や推移などを考察する。公民的分野では，対立と合意，効率と公正，協調，持続可能性などに着目して課題を追究する。中学校社会科として身に付けたこれらの視点を働かせることで，「地理総合」の学習においてより広い視野から多面的・多角的に考察，構想することができると考える。

(2)社会参画の視点

「地理総合」では，目標⑵に「地理的な課題の解決に向けて構想したりする力」を養うと定められている。構想することについては，大項目Ｃの⑵「生活圏の調査と地域の展望」で，生活圏の地理的な課題について主題を設定し，考察，構想し，表現する学習活動を設定することと位置付けられている。地理的分野の学習では大項目Ｃの⑷「地域の在り方」に位置付けられ，「地理総合」と関連する。さらに，課題解決に向けて構想することについて，公民的分野の大項目Ｄの⑵「よりよい社会を目指して」の内容が関連する。この中項目は，持続可能な社会を形成することに向けて，よりよい社会を築いていくために解決すべき課題を多面的・多角的に考察・構想し，考えたことを説明，論述する学習が設定されている。中学校社会科のまとめとして，社会的な見方・考え方を働かせて課題を探究する学習展開が求められている[7]（図４）。

これらの項目の関連は，教科の目標と符合する。小・中学校社会科では「平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を」育成する。高等学校地理歴史科では「平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民と

しての資質・能力を」育成すると定められている。このような目標の構造を踏まえ，国家及び社会の形成者として必要な資質・能力の育成について，「社会参画」を視点として中学校社会科と「地理総合」の関連を押さえる必要があると考える。

４．「地理総合」への接続を図る上での課題

井田仁康は，中学校社会科地理的分野と高等学校地理歴史科「地理総合」との関係について，「中学校で地理の基本的な内容の柱となる系統地理と地誌の基礎を学び，「地理総合」では中学校での知識技能を活用した，主題的な学習，課題解決的な学習となり」[8]と指摘している。本研究では，この指摘に着目して「地理総合」への円滑な接続を図る上で，中学校社会科学習にはどのような課題があるのかを考察していく。

(1)課題を追究したり解決したりする学習の充実

中学校での学習成果を踏まえて「地理総合」の学習が展開されることを考えると，中学校で課題を追究したり解決したりする学習を充実させていくことが，「地理総合」の学習の土台を築くことになると考える。学習指導要領では，例えば「場所などに着目して」と，働かせる地理的な見方・考え方の視点が示されている。課題を追究したり解決したりする学習を展開する授業を設計するに当たり，示された視点を押さえて適切に課題や追究の仕方を設定していくことが課題となる。

「地理総合」で働かせる地理的な見方・考え方については，その基礎を地理的分野の学習で身に付けていく必要があると考える。そのためには課題を追究する学習を展開する中で，地理的な見方・考え方を問いの形で生徒に示し，地理に関わる事象の意味，特色や相互の関連などを考察する学習活動を適切に設定することが課題となる[9]。その際，適切な課題を，生徒が捉えやすい問いの形で示す必要がある。そして，考察したことを基に理解させ，概念的な知識として整理していく必要がある。判断力の育成については，地理的な課題を捉え，解決に向けて学習したことを基に複数の立場や異なる意見などを踏まえて選択・判断する場面を適宜設定していく必要がある。

「地理総合」では，目標の(2)に「考察，構想したことを効果的に説明したり，それらを基に議論したりする力を養う」とある。そのためには，地理的分野の学習の中で思考・判断したことを適切に説明する力を身に付けておく必要があると考える。その際，事象間の関連や地域の変容などを言語や図式を用いるなどして適切に表現する力や，地図を用いて説明する技能などを身に付ける学習場面を組み込むことが肝要と考える。

(2)地図や地理情報システムの活用

「地理総合」の大項目Ａとの接続については，中学校社会科において，地図や地理情報システムを活用した学習を工夫することが鍵になると考える。その中項目(1)「地図や地理情報システムと現代世界」の内容の取扱いに，「様々な地図の読図によって現代社会を地理的な視点から概観するとともに，球面上の世界の捉え方にも習熟するよう工夫すること」，「地図や地理情報システムの適切な活用が身に付くよう工夫すること」，「諸資料の地理情報化や地図化などの作業的で具体的な体験を伴う学習を取り入れるよう工夫すること」と示されている。ここで，国立教育政策研究所が実施した平成 25 年度中学校学習指導要領実施状況調査によると，「様々な地図の読図」については，地理的分野の学習でよく取り組まれ成果が現れているが，「球面上の世界の捉え方」に関しては課題があると指摘されている[10]。指導上の課題として，地理的分野の「世界の地域構成」の学習において，地図と地球儀を相互に比較して位置関係や分布などを捉えたり，球面上の位置について適切な課題を設定して地球儀や地図を使って調べたりする学習の充実を図る必要があると考える。

「地図や地理情報システムの適切な活用」については，「地理総合」の学習の中で，中学校までの学習で身に付けた情報を収集し，読み取り，まとめるといった一連の学習活動において身に付けた地理的技能を活用し，その習熟を図ることが求められている[11]。特に，地理情報システムについては，文部科学省が進める GIGA スクール構想により，今後，一層積極的に活用することが求められよう。例えば，国土交通省国土地理院は，「地理院地図」において web 上で地図情報を提供している。これは地図だけでなく，空中写真や防災などに関わる地理情報などを提供しており，地理的分野の「日本の様々な地域」の学習に活用できる。また，公民的分野の「世界平和と人類の福祉の増大」の学習で地球環境，資源・エネルギー，貧困などの地球的課題を取り扱う際に，地理情報システムを利用して情報を収集したり読み取ったりすることが有用と考える。このような学習活動を中学校社会科で計画的に位置付けることで，

「地理総合」への円滑な接続が図れると考える。さらに，地図や地理情報システムの有用性を考察させる上でも，このような学習経験の蓄積は効果的と考える。

中学校社会科では，「諸資料の地理情報化や地図化」といった作図，描図の技能については，読図に比べ十分身に付いているとは言えない状況と思われる[12]。筆者自身の授業実践を振り返ると，読図については教科書や教科用図書「地図」，副教材として利用する資料集に様々な主題図が掲載されており，読図を行う機会が多い。これに対して作図については教師がワークシートを用意して意図的に授業に組み込んでいく必要を感じている。つまり，作図や描図を組み込んだ作業的な学習活動を意図的に位置付けていくことが課題と考える。

(3)野外観察や調査を取り入れた授業の構築

野外観察や調査の取組については，地理的分野と「地理総合」の両方に内容として位置付けられている。野外観察や調査の技能を地理的分野の学習で身に付けておくことで，「地理総合」への円滑な接続を図ることができると考える。しかし，国立教育政策研究所が実施した平成 25 年度中学校学習指導要領実施状況調査によると，野外観察や野外調査の実施率は 10.3%と極めて低い状況である[13]。この点に関しては，教室内で地形図や統計資料を活用しての作業的な学習に止まっているのが実態と思われる。そのため，特に地理的分野の「地域調査の手法」では，観察や野外調査，読図や作図といった作業的な学習を組み込んだ課題解決的な学習の過程を工夫して単元構成し，観察や野外調査を確実に取り組み，地理的な見方・考え方や地理的技能を育成していく授業の構築が喫緊の課題になると考える。

(4)地域の課題解決に向けて考察・構想する学習の工夫

「地理総合」の大項目Ｃの(2)「生活圏の調査と地域の展望」では，実際に観察や調査を行い，地域の課題を見出し，その解決策を考察，構想する。中学校社会科では，地理的分野の大項目Ｃの(4)「地域の在り方」や公民的分野の大項目Ｄの(2)「よりよい社会を目指して」が関連することは先に述べた。

地理的分野の「地域の在り方」は，今回の学習指導要領で新設された項目である。この項目が設定された趣旨を踏まえ，地域の課題を見いだし考察するなどの社会参画の視点を取り入れた探究的な学習になるよう単元構成を工夫していくことが課題となる。「地理総合」との接続を図る上で，持続可能性に着目して解決策を構想していくことが鍵になると考える。そして，考察，構想したことを地図や図式を使って説明したり，自分の解釈を加えて論述したりといった表現する学習活動を設定することも，「地理総合」との接続を図る上で必要となる。

公民的分野の「よりよい社会を目指して」は，中学校社会科のまとめとして，持続可能な社会を形成するという視点から，よりよい社会を築いていくために解決すべき課題について探究し，その過程や結果を説明したり論述したりしていく。この趣旨を踏まえて授業を展開していく必要がある。その際，地理的な見方・考え方，歴史的な見方・考え方，現代社会の見方・考え方といった三分野で培った見方・考え方を総合的に働かせて考察・構想することが求められている[14]。この学習経験が「地理総合」において，より広い視野から多面的・多角的に考察・構想することへつながると考える。

５．おわりに

本研究では，学習指導要領と解説の記述を手がかりにして「地理総合」と中学校社会科との関連を明らかにし，「地理総合」への接続を図る上での中学校社会科学習の課題について考察した。まず，地理的分野と「地理総合」の内容の構成とその関連について，地理的な技能，地誌的な学習，地域調査学習，地理的な見方・考え方の四つの視点から明らかにした。さらに，中学校社会科の分野構造，社会参画の二つの視点から，中学校社会科との関連を捉えた。次に，「地理総合」への円滑な接続を図る上での，中学校社会科学習の課題について考察した。中学校社会科の学習を活用して「地理総合」を展開することに着目して，課題を追究したり解決したりする学習の充実，地図や地理情報システムの活用，野外観察や調査を取り入れた授業の構築，地域の課題解決に向けて考察・構想する学習の工夫の四つの視点から考察し，中学校社会科の授業設計や学習指導上の課題について指摘した。

本研究の今後の課題として，中学校社会科の実践上の課題解決に向けて，授業設計の検討や働かせる見方・考え方を踏まえた適切な問いの設定など学習指導の工夫改善を図るとともに，課題把握，課題追究，課題解決といった学習の過程を踏まえた学習展開の工夫，小学校，中学校，高等学校を見通した資質・能力の計画的な育成について検討し，その成果

を指導計画に位置付けていく作業が必要になると考える。

付記

大友秀明先生には，筆者が埼玉大学教育学部附属中学校在職時に，中学校教育研究協議会の指導助言者としてご指導いただきました。また，埼玉県社会科教育研究会の研究活動をはじめとして多くのご示唆をいただきました。心より感謝申し上げます。

本小論は，平成 31 年 3 月 21 日に専修大学で開催された日本学術会議・日本地理学会公開シンポジウムで発表した内容に，その後の研究成果を加えてまとめたものである。

【註】

1) 高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）第 2 章　第 2 節　地理歴史　第 2 款　第 1　地理総合　3 内容の取扱い(1)アに「中学校社会科との関連を図るとともに」と示されている。
2) これらの特色は，地理的分野の目標(1)が「我が国の国土及び世界の諸地域に関して，地域の諸事象や地域的特色を理解する」とあるのに対して，「地理総合」の目標(1)が「地理に関わる諸事象に関して，世界の生活文化の多様性や，防災，地域や地球的課題への取組などを理解する」とあることからも捉えられる。
3) 文部科学省（2019）:『高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説　地理歴史編』，東洋館出版社，pp.71-73 を参照。
4) 「地域の在り方」で取り上げる地域は，各学校において具体的に地域の在り方を考察できるような，適切な規模の地域に設定することとなっており，必ず生徒の身近な地域に設定しなければならないとする縛りはない。また，学習の効果を高めることができる場合，「地域調査の手法」の学習や「日本の諸地域」の中で学校所在地を含む地域の学習と結び付けて取り扱うことができると，地理的分野の内容の取扱いに示されている。
5) 文部科学省（2019）:『高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説　地理歴史編』pp.68-69 に学習指導の展開例が示されている。その中に「これまでの「地理総合」の学習内容と，小・中学校社会科の「地域調査」の経験を踏まえて調査する課題を決める」「小・中学校社会科で行った地域調査学習をより深めるスパイラルな学習となるように配慮する」という記述がある。
6) 中学校学習指導要領（平成 29 年告示）第 3　指導計画の作成と内容の取扱い 1 (2)を参照。
7) この学習の取り扱いとして，「身近な地域や我が国の取組みとの関連性に着目させ，世界的な視野と地域的な視点に立って探究させること。また，社会科のまとめとして位置付け」と，公民的分野の内容の取扱いに示されている。
8) 井田仁康（2019）は，地理学習の中学校から高等学校の学習内容とその関連性について，中学校で地理に関する基礎的な知識技能や能力を習得し，高等学校「地理総合」でその知識技能を活用した主題的な学習，課題解決的な学習に取り組み，「地理探究」で地球的課題などの課題解決に向けた深い地理的知識・技能の育成を図ると整理している。
9) 文部科学省（2018）:『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説　社会編』では，「地理的分野の学習において主体的･対話的で深い学びを実現するために，社会的事象の地理的な見方･考え方に根ざした追究の視点とそれを生かして解決すべき課題（問い）を設定する活動が不可欠である」と解説している。同書の p.30 を参照。
10) 国立教育政策研究所は，ペーパーテスト調査結果から「地図等の資料から地理的事象を見いだし，それが意味することや影響を考察することについては，相当数の生徒ができていると考えられる」，「地球上の位置を球面や平面上で示したり，捉えたりする基本的な技能の習得については，課題があったと考えられる」と分析している。
11) 文部科学省（2019）:『高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説　地理歴史編』p.47 を参照。
12) 国立教育政策研究所は，ペーパーテスト調査結果から「資料から読み取った情報を地図等にまとめる技能の習得については，課題がある」と分析している。
13) 国立教育政策研究所教育課程研究センター(2018)『平成 25 年度中学校学習指導要領実施状況調査　教師質問紙調査結果(社会)』p.13 を参照。
14) 「よりよい社会を目指して」の内容は，「社会的な見方･考え方を働かせて」と表記されている。

【参考文献】

・井田仁康（2019）「『地理総合』とは何か」『学術の動向』第 24 巻 11 号，pp.10-13.

・碓井照子編（2018）『「地理総合」ではじまる地理教育―持続可能な社会づくりをめざして―』古今書院。

・国立教育政策研究所教育課程研究センター(2018)『平成 25 年度中学校学習指導要領実施状況調査教師質問紙調査結果(社会)』国立教育政策研究所。

・国立教育政策研究所教育課程研究センター(2018)『平成 25 年度中学校学習指導要領実施状況調査報告書―結果のポイント及び教科等別分析と改善点―』国立教育政策研究所。

・文部科学省（2018）『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説　社会編』日本文教出版。

・文部科学省（2018）『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説　社会編』東洋館出版社，pp.29-82.

・文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説　地理歴史編』東洋館出版社，pp.35-75.